

## 創造都市におけるコミュニケーションデザイン

神戸ビエンナーレ 2013 の視点から

### COMMUNICATION DESIGN IN CREATIVE CITY From The Point Of View Of KOBE Biennale 2013

荒木 優子 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授  
逸身 健二郎 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授  
野口 正孝 デザイン学部ファッションデザイン学科 教授  
馬場田 研吾 元・デザイン学部プロダクトデザイン学科 実習助手  
萩原 こまき デザイン学部ビジュアルデザイン学科 助教  
花畑 江梨 元・デザイン学部ファッションデザイン学科 実習助手  
清水 薫 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 実習助手

Yuko ARAKI Department of Visual Design, School of Design, Professor  
Kenjiro ITSUMI Department of Product Design, School of Design, Professor  
Masataka NOGUCHI Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor  
Kengo BABATA Department of Product Design, School of Design, Former Assistant  
Komaki HAGIWARA Department of Visual Design, School of Design, Assistant Professor  
Eri HANABATA Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Former Assistant  
Kaoru SHIMIZU Department of Visual Design, School of Design, Assistant

#### 要旨

神戸ビエンナーレ 2013 のメイン会場・メリケンパークに、会期限定でオープンした輸送用コンテナを利用した公式デザインショップの企画とデザイン、及びその展開についての研究。このプロジェクトは、これまでのアートの概念を越えた新しい表現や価値、都市の魅力の創生をコンセプトに開催される神戸ビエンナーレにおいて、神戸芸術工科大学が保有するリソースを活かし地元企業との連携で、オリジナルグッズの企画・開発から空間デザイン、運営までをトータルに行った、地場産業と地域活性化のための新しい試みである。開発プロダクトをプレゼンテーションするためのショップとスタンドを併設し、アートを接点に都市に集う多種多様な人々の交流をテーマにデザインした。また、同じくビエンナーレ会場である灘区・ミュージアムロードの公共施設で、研究で制作した3基の展示什器を使用し、市民を対象にしたデザインとアートによる地域交流や体験を深めるコンテンツを展開した。

#### Summary

This study is about the planning, design and deployment at Meriken Park, the main venue for KOBE Biennale 2013, featured official design shop housed in shipping container, operating only for the duration of the event. Drawing on the resources of Kobe Design University, this project was a new attempt at revitalizing the region and local industry for which we provided a total service, from the planning of the original goods to the spatial design and actual operation stages. Our design theme was the exchange of the great diversity of people who congregate in cities, with art as their contact point. In addition, at the Museum Road in Nada-ku where is also the venue of KOBE Biennale 2013, we installed three display furniture in public facilities along the road and, in the spaces created by their placement, worked with students and artists to hold exhibits and workshops on design and art aimed at local residents.

## 1. ポップアップ・ショップ

神戸ビエンナーレ組織委員会において、主会場であるメリケンパークに公式デザインショップ設置が決まり、20ftのコンテナが提供された。ビエンナーレの開催主旨に基づいたシティープロモーションを目的に、本研究で開発するオリジナルグッズを販売するための、ローコストで効果的な仮設店舗のデザインが求められた。広大な会場の中でコーナーとして存在感を出すために、4㎡のドリンクスタンドをコンテナと角度をつけて設置し、コンテナ前に人が留まるスペースを作り、ショップへの導線を描いた。そうすることによって周囲の作品展示用コンテナと差別化がはかれ、空間としてまとまりが出た。ショップ正面のデザインは、「神戸ビエンナーレ 2013」のテーマ“saku”（時代を裂き、新価値創造を目指す）から、その主旨を表現したロゴを大きく表示し、公式ショップであることをアピール。ショップ内部には、ホスピタリティのかたちをデザインしたオリジナルグッズをディスプレイした。（図1）



図1 KOBE BIENNALE 2013 “THE SHOP / THE KIOSK” メリケンパーク：荒木優子

## 2. 神戸ビエンナーレ 2013・オリジナルグッズ

ポスターをはじめとするさまざまな広報ツールに展開された「神戸ビエンナーレ 2013」のビジュアルコミュニケーションの要素の一つであるフラワードットパターンから、さまざまなオリジナルグッズを制作した。

ファブリックに小花のパターンを印刷スクリーンのように重ねてプリントすることで、ニュアンスのあるグラデーションが現れる。その生地を使用してぬいぐるみやトートバッグに縫製し、一つ一つ柄の出かたが異なる製品を作った（図2）。また、ビエンナーレモチーフを織りだしたコットンジャガードの、温かい風合いとゆったりとしたやわらかなシルエットが特徴のリラクシングウェア（図3）、表紙に港町・神戸をイメージしたモチーフがカットワークされた淡い色上質紙のノート、サイズ違いで使い分けが可能な機能的な5ミリ方眼の糸綴じノート（図4）なども制作した。さらに、フラワードットが画面いっぱいに溢れ出す映像を制作し、ショップ内部の壁面に投影した。上映時間3分、リピート再生（図5）。



図2 テディベア、トートバッグ／ポーチ（上段）：荒木優子  
オックスフォードシャツ／ブックカバー（下段）：野口正孝



図3 “HAVE A GOOD DAY” リラクシングウェア：花畑江梨



図4 カラーペーパーノート：萩原こまき(左)、5ミリ方眼ノート：荒木優子(右)

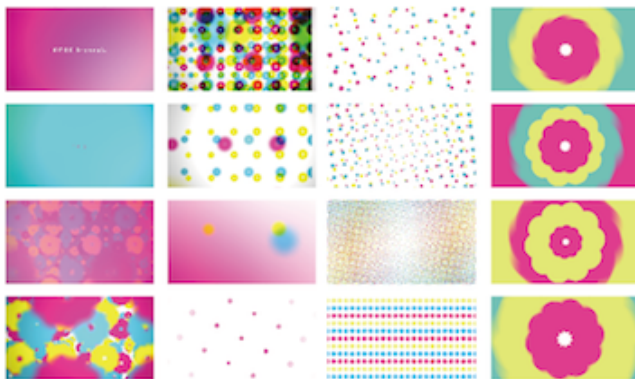


図5 “FLOWER DOT 2013” 映像：清水薫

### 3. 大学発、ブランド“KOBE DESIGN”

公式ショップ“THE SHOP”における商品化を前提に、研究メンバーが各々プロダクトの提案を行った。播州帆布のバッグ、積層合板を使用したコンパクトな組立て式スツール、パウチ加工のフラワーベースやマグネットクラスプのペンダント、メッセージカードにもなるラッピング用タグなど、“KOBE DESIGN”のブランドのくくりのもと、ファッション、雑貨、アクセサリから家具に至るまで、いずれも生活のさまざまな場面で彩りを添えるものがあった。以下に制作した一部を紹介する。

兵庫県北播磨地域の地場産業で先染め綿織物の「播

州織」は、織柄の美しさと発色の良さが特徴である。その播州織を用いて、ビエンナーレカラーのボーダー柄を織り、トートバッグ、三角ショルダー、スマートフォンポシェット、ポーチに展開した(図6)。F字型の脚が互いに支え合い、最後に座面をはめ込むことで自立するスツール。釘やビスなどの部品を使わず組立てられる(図7:左)。両面使用可能な、ミラー付きの小テーブルとコートラック付きの小テーブル(図7:右)。使わないときは折り畳んで仕舞える、ギフトにも適した、ポリエチレンのスタンディングパウチに金属を合わせた花瓶シリーズ(図8:左)。蛍光色やカラーエッジの亚克力を、レーザーカッターで切り出したパーツを自由に組み合わせペイントを施したアクセサリ(図8:右)。



図6 播州織りトートバッグ：野口正孝



図7 “LEAN” スツール：馬場田研吾(左) / Small Mirror Table, Coat Rack Small Table：逸身健二郎(右)



図8 パウチ花瓶シリーズ：逸身健二郎（左）／アクリルアクセサリ：萩原こまき（右）

#### 4. ポップアップ・スペース “nomaD”

まちの賑わいや活力を市民と共に創出することを地元大学として求められており、その継続的取組みの一環として、「神戸ビエンナーレ 2013・現代陶芸展」の会場であるBBプラザ美術館（神戸市灘区岩屋）のアトリウムに三基の展示什器を設置し、研究で開発した製品のプレゼンテーションを行った（図9）。これに連続して、ビエンナーレの会期に合わせて学生・OB・アーティストによる作品展示やワークショップを週替わりで開催した。

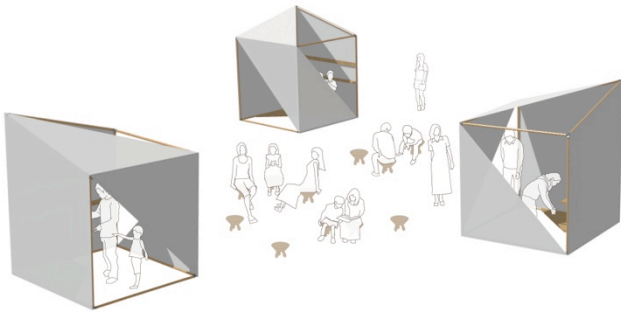


図9 三基の展示什器システムによる展開イメージと実例。容易に組立て・解体・移動ができ、さまざまな展示に対応できる。

#### 5. 記録集 “SAKU”

2012年度受託研究としてスタートした「神戸ビエンナーレ 2013」のビジュアルデザイン開発の取り組みを起点とし、そこから派生するプロダクト、ファッション、空間、映像に至るまで、都市に集まる多種多様な属性の人々とのコミュニケーションのための総合的なデザインの探究をテーマに、研究で展開したプロジェクトの成果を中心に冊子にまとめた。タイトルは、「神戸ビエンナーレ 2013」のテーマ“SAKU”をそのまま引用し、そのテーマから読み解かれる「咲」、「咲」、「作」、「策」の四つの漢字を各章の扉に設定して、多面的に展開したプロジェクトをわかりやすく紹介している（図10）。A4変形、平綴じ、本文48ページ+表紙。



図10 “SAKU”：荒木優子